

# 『雪国』の冒頭部に隠されたもの

佐藤 健 児

キーワード：事態把握、視点表現、翻訳、モダニズム文学

## 1. 『雪国』と新感覚派、モダニズム文学の関係について

本稿は、川端康成の『雪国』の冒頭部を巡る「視点」の議論を整理するとともに、その成立の背景に迫ってみるといのが、その目的である。

まず小説『雪国』が生み出された背景を探ってみたい。「小説『雪国』は戦後の作品でありながら、川端が新感覚派時代に培った映像的感觉を表現の随所に見ることができる」（小倉 [2017] 5頁）と述べられているが、戦前、雑誌に断続的に発表された連作を戦前、戦後何度かの改稿を経てまとめられたというのが正確である。雑誌『文藝春秋』1月号に連載初出時（1935年）には、『雪国』というタイトルもまだなく、冒頭部の一章は『夕景色の鏡』というタイトルであった。また、本稿のテーマである『雪国』の冒頭部も初出冒頭にはなく、島村がどうしてここに来たのかの説明をした後、「国境のトンネルを抜けると、窓の外の夜の底が白くなった。信号所に汽車が止まった。」と書かれていた（筆者：旧仮名遣い旧漢字を新仮名遣い新漢字に改めた）。

若き日の川端康成は新感覚派の一人として名を馳せていた。新感覚派はヨーロッパの芸術運動であるモダニズムからも強い影響を受けている。ヨーロッパのモダニズムは「18世紀の産業革命を背景にした資本主義・消費社会の到来と、大量破壊兵器の導入でもって人的・物的被害が想像を絶する規模で生じた第一次世界大戦をその背景として持っている」（大村 [2016] 3頁）。

日本において、関東大震災の復興期に現れたこの文学運動の特徴は、航空機や汽車や電車といった運動する機械と親和性が高く、新しい時代をまさしく象徴している。『雪国』の冒頭に汽車が登場するのが偶然ではないことがわかる。若き日の川端が新感覚派であった事実が、ここに現れている。また、新感覚派を代表する作品として、横光利一の『頭なびに腹』の冒頭部があまりに有名であるので、比較してみたい。

真昼である。

特別急行列車は満員のまま全速力で駆けていた。

沿線の小駅は石のように黙殺された。

擬人法と比喩の手法を用いたこの文章は、当時の作家たちの文体に大きな影響を与えた

とされる。川端の『雪国』の冒頭部と同じくモチーフに列車を使っているだけでなく、三人称を使った描写である点も共通している。この横光の表現に直接影響を与えたと思われる小説がある。堀口大學の翻訳によって紹介されたポール・モーラン（ポオル・モオランとも表記）の『夜ひらく』である。

汽車は国境に近づいていた。  
稲妻はなお相変わらずわれ等と同行していた、  
峰と峰との間に交わされるはてしのない会話のようなお喋りな雷鳴の注釈を附けながら。

日本の新感覚派は日本モダニズム文学の重要なグループであるが、その命名をしたのは批評家の千葉亀雄である。彼は当時のフランスのモダニズム作家であるポール・モーランの表現と比較して、「新感覚派」という名前を彼らに与えたのである。評論家でもあり翻訳家でもあった生田長江によって『頭ならびに腹』と『夜ひらく』の表現技巧が似ていると批判されたが、横光は否定している。これについては後で詳しく触れたい。

横光の『頭ならびに腹』は翻訳されることがなかったが、モダニズム研究者の手によって冒頭部だけ翻訳されている（Suzuki Sadami [2009] p.72, translated by Miri Nakamura）。

It was high noon. The special express train was running at full speed, completely full. The small station along its trail was silenced like a stone.

目の前を猛烈な勢いで、列車が轟音を立てて走り去った情景を見事に訳している。しかし、『頭ならびに腹』の冒頭部の原文には、『雪国』の冒頭部で描かれていた主人公と読者の一体感、臨場感を生み出すような仕掛けはない。詳細は次節に譲るが、『雪国』の冒頭部は主人公と共に読者も列車内にいるかのような感覚を与えるのに対して、『頭ならびに腹』の冒頭部の読者は目の前を走り抜けて行く列車を外側から傍観するしかない。横光の表現が動的でダイナミックなのに対して、川端の『雪国』の冒頭部は動きが感じられるものの、静的な時間の流れを感じさせる点も対照的である。

## 2. 『雪国』の冒頭部を巡る論文の考察

川端康成の小説『雪国』の冒頭部は日本人なら誰でも知っていると言っていいほど有名な書き出しで始まる。

国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。信号所に汽車が止まった。

冒頭部を読むと、誰の視点かはわからないが、情景描写のように読める。この冒頭部に後続する文、「向側の座席から娘が立って来て、島村の前のガラス窓を落した。」まで読むと、登場人物の島村が今まさにこの汽車に乗っていて、この場面を体験している体裁であることがわかる。語り手である主人公と読み手である私たちがまるで同じ汽車の乗っているかのような臨場感のある文章であるとされる。

この『雪国』の冒頭部を巡って、多くの論文が書かれてきた。特に英語訳との視点の違いを論じた研究書が多い（金谷 2004；池上 2006a, 2006b；熊倉 1990；湯浅 2010；安藤 2012, 2015 など）。ここでは池上 [2006b] によって考察された内容を中心に紹介したい。

『雪国』のサイデンステッカー (E. G. Seidensticker, *Snow Country*) の翻訳を下に挙げる。

The train came out of the long tunnel into the snow country. The earth lay white under the night sky. The train pulled up at a signal stop.

冒頭部の一文「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。」が、日本語の原文と英語訳とで視点が違っていることが議論の中心である。

池上は川端の原文を「情景描写の地の文のようにも読める」とするが、「実は汽車に乗って旅をしている主人公が、いままさに体験していることを語るという構図となっている。(引用符をつけて主人公の心の中のつぶやきとして読んでもおかしくない。)」すなわち、「話し手の臨場を想定させる文である」のであり、「主人公は体験の主体として、自らを乗っている汽車（主人公がその中にいて動きを共にしているという意味で主人公自身の〈拡大エゴ〉でもある）ともども〈ゼロ〉化され、言語化されていない」（池上 [2006b] 195 頁）とする。

一方、「英語訳のほうはどうかといえば、これも情景描写の地の文のようにも、また汽車の中の主人公による自らの体験の語りとも読める」とするのだが、「後者の場合は、主人公が自らの分身を汽車の中に残したまま、汽車の外に身を置いて、自らの分身を乗せてトンネルから出てくる汽車を客体として捉えるという構図になっている」と述べる (195 頁)。

日本語の原文は「臨場を想定させる文」であるのに対して、英語訳は「汽車を客体として捉え」ている、すなわち主人公が汽車の外からこの情景を眺めているということになる。

池上はこの考察を著書にする前にNHKの教育番組で語ったのだが、それに対して金谷は、日本語原文が「虫の視点」であり、英語訳が「神の視点」であるとし、日本語と英語の事態の把握の仕方を対比して論じている（金谷 [2004] 31 頁）。

森田も『雪国』の冒頭について日本語原文は「刻々移りゆく車窓の風景に驚嘆し、その折々の現在時点での発見や、瞬間瞬間の心の内を端的に伝える」（森田 [1998] 15 頁）としている。

このように、いままでの議論をまとめると、サイデステッカーによる英語の訳文は「欧米の近代文学が一つの理想としたように、歴史的客観性のある書き方」で「書き手の主観的な「声」を排除して、雪国の景色は汽車も夜も雪国を「外」から、いわば神のような全知の視点で捉えられていると読むことができる」(熊倉 [1990] 62頁)。一方、日本語の原文はその場にいるかのような臨場感を特徴とし、「出来事の推移に従いながら、出来事を一コマ、一コマを継的に描写する日本語という表現方法の差異である」(湯浅 [2010] 24頁)。

しかし、果たしてこれは日本語と英語の「表現方法の差異」と呼べるものなのであるか。筆者は、これを単なる英語訳の様式の差異ではないのか。つまり、英語訳でも主語 The train を採らずに英訳することは可能ではないのかと思っていた。そんな素朴な疑問に答える著書が翻訳を専門とする著者から出版された。山本 [2020] 『翻訳の授業—東京大学最終講義』である。

### 3. 『雪国』の冒頭部を巡る論文の批判的考察

山本の著書については後述するが、まず、川端の『雪国』の冒頭部について、更に考察しておきたい。主人公が「〈ゼロ〉化され、言語化されていない」(池上 [2006b] 195頁)とされる原文であるが、青山によれば、「この三文は三上章のいうピリオド越えの格好の見本である」「つまり、従属句「国境の長いトンネルを抜けると」は、後続する三つの句と組み合わせても文として成立する」(青山 [2020] 189頁)というからである。具体的には以下のようになるだろう。

【汽車が】国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。

【汽車が】国境の長いトンネルを抜けると、夜の底が白くなった。

国境の長いトンネルを抜けると、信号所に【汽車が】止まった。

この【汽車が】はこの文の文法的な主語に十分なり得る。しかし、「雪国であった」「白くなった」という「発見」の助動詞「た」がここに用いられている以上、ここには発見した人物が想定されているはずである。

この小説が一人称で書かれた小説であるなら、仮の主語は「私の乗った汽車が」であり、三人称で語るなら「(主人公の) 島村の乗った汽車が」である。しかし、発見した人物として想定される「わたし」はここに表出されない。なぜか。この小説が三人称で語られているからである。

この三人称の物語において誰が視点人物なのかという問題に対して、ジェラルド・ジュネットは「焦点化 (focalisation)」という語を用い、「焦点化ゼロ」、「内的焦点化」、「外的焦点化」と大きく三つの種類に分けている。視点が特定の人物に制限されない物語、すなわち「神の視点」「全知の語り手」によるものを「焦点化ゼロ」、ある登場人物を視点人物

として、思考と感情を語るものが「内的焦点化」、ヘミングウェイの『殺し屋』などのように、キャラクターの行動、設定のみに焦点を当てるのが「外的焦点化」である。

『雪国』は、視点人物である島村の「内的焦点化」にあたるのだが、視点人物が島村一人の目だけを通して描かれる。このような物語をジュネットは「内的固定焦点化」と呼んでいる。島村の思考と感情を語る「内的焦点化」（島村が見た人物や事物に対する語り）によって物語は進行する。つまり『雪国』は三人称で語られる物語であっても語り手は一人しか存在しない。このような物語の語りの構造が、この問題の背後にあることを確認しておきたい。

次に、英語訳についてはどうか、先述の山本によれば、「サイデンステッカーの訳はたしかに、語り手の視点から離れて、神の全知の視点から書かれているかもしれませんが、英語でも個人の視点からものを述べることはちゃんとできる」とし、英訳例を以下のようにしている（山本 [2020] 22 頁）。

Through the long border tunnel – and it was the snow country!

こう英語で表現すれば「汽車に乗っている人がいままさに体験していることを話している」という形の文になる。さらに著者は「逆に日本語から「書き手の主観的な『声』を排除すること」（23 頁）もできるとし、以下の文を挙げる。

島村の乗った汽車は、国境の長いトンネルを抜け、雪国へと入った。そこには暗い夜空のもと白い大地が広がっていた。汽車は信号所に止まった。

山本は「どのような視点で書かれているか？ それは言語の問題ではなく様式の問題」と述べ、「英米で好まれる小説作法は全知全能の神が書いているかのような、語り手の主観が極力排除されたもの」であるのに対して、「日本では作者個人の声や視点が地の文にまでにじみ出ているようなスタイルが、小説の文体として好まれます」（山本 [2020] 23-24 頁）と指摘する。

いままでの議論は、日本語と英語の言語の差異ばかりを強調していたが、それは表現、すなわち文体の好みの問題でしかないという見方もできることは重要である。

#### 4. 認知言語学の「事態把握」と翻訳の問題

山本の主張で注意しなければならないのは、これまでの『雪国』の冒頭部を巡る議論の基底には、認知言語学の基本概念の一つである「事態把握 (construal)」があることである。「事態把握 (construal)」とは、話者がその出来事をどう認識するかということである。

例えば、「猫が魚を食べた」とするのか、「魚が猫に食べられた」とするのか、同じ出来事であっても、それをどういう視点から捉えるか、認識するかによって、違った言語表現

が産出される。

この認知言語学の概念に基づき、〈主観的把握 (subjective construal)〉を好む「日本語」と〈客観的把握 (objective construal)〉を好む「英語」という仮説に基づき、これを対照させる議論が行われてきたと言える。筆者もこの「事態把握」に〈主観的把握〉と〈客観的把握〉があるという仮説を否定しない。また、言語に「類型論」的な傾向があることも認める。筆者が危惧しているのは、〈主観的把握〉と〈客観的把握〉の議論と「翻訳の様式」の議論が、かみ合っていないのではないかという点である。

考察に入る前に〈主観的把握〉と〈客観的把握〉の定義について確認しておきたい。〈主観的把握〉とは、『雪国』の冒頭部のように話者が対象とする出来事の中に入り込んでいる状態で事態把握をする傾向のことである。これに対して、〈客観的把握〉とは『雪国』の冒頭部のサイデンステッカー訳のように、話者が対象とする出来事に距離を取り、外から眺める状態で事態把握をする傾向のことである。

池上 [2006a] は、B. L. ウォーフ [1939a] のある言語における〈好まれる言い回し〉 (fashions of speaking) を援用して、日本語話者が好んで使う〈事態把握〉が〈主観的把握〉ではないかと述べている。ただし、池上が指摘するように、ここで注意しなければならないのは、例えば『雪国』の冒頭部のような出来事を体験した場合、日本人話者なら必ず川端のように〈主観的把握〉をするわけではないということである。逆に英語話者なら、サイデンステッカー訳のように〈客観的把握〉を必ずするわけでもない。〈主観的把握〉と〈客観的把握〉のどちらを選択するかは、話者自身がどちらの〈事態把握〉を取るかにかかっているのである。

しかし、『雪国』の冒頭部のように名訳などの評価が与えられてしまうと、われわれはその表現が絶対的な基準として見てしまう傾向がある。もちろん、サイデンステッカー訳が英語話者には自然な小説の書き出しに感じられるというのも事実である。しかし『雪国』は、英語訳以外には様々な翻訳が行われているにも関わらず、英語訳はサイデンステッカー訳以外の翻訳はなかなか行われぬ。『雪国』がサイデンステッカー訳によって海外で有名になり、ノーベル文学賞を取ってしまったからであると思われる。

例えば、『雪国』の冒頭部の中国語訳 (叶渭渠訳《雪国》) の一つは、次の通りである。

穿过县界长长的隧道，便是雪国。(訳文1)

この翻訳に対して中国語話者である盛 [2006] は、「中国語らしくなく、むしろ日本語の影響を受けた訳文である」と述べて以下の仮訳をした上で「“火车”が訳され、また後に動詞“来到”も付け加えることによって、認知者が「汽車」に乗っていることが判明できる」(下線著者、590-591頁)と述べている(筆者：火车は「汽車」「列車」のこと)。

火车穿出长长的边界隧道，一下子就来到了雪国。(仮訳)

このように、日本語以外の話者であっても、日本語原文の表現や他の翻訳を知っていると、中国語の(訳文1)のように、中国語話者の好む〈事態把握〉を使わず、日本語の影響を受けた表現になってしまうこともあるのではないだろうか。

日本語話者にとっては、『雪国』の冒頭部は何の違和感もないが、外国語話者が読むと不思議な感じを与えてしまう。そこに外国語への翻訳する際の難しさが、サイデンステッカー訳が定着してしまったために、それが他に選択のない英語の定訳であるかのように議論が行われてきたことに留意する必要がある。

## 5. 『雪国』と「新主観主義的表現」

『雪国』の冒頭部に現れた川端の日本語の文章センスのすばらしさは、決して偶然に生まれたものではない。『頭ならびに腹』と『夜ひらく』の表現技巧が似ていると生田長江によって批判されたこと既に述べたが、横光はこれに対して「『夜ひらく』の全篇は一人称であるからだ。一人称であるが故にあの全篇はあれほど新鮮に感覚的になったと思ふ。もしモーランが三人称で書き出して、『夜ひらく』に於けるが如き新鮮な感覚を出し始めたら、そのとき一つ私も彼の真似をしたいものだと思つてゐる」(「ユーモラス・ストオリイ」『文藝春秋』1925年5月)と反論している(筆者:旧仮名遣いのまま)。

ここで注目したいのは、横光が考えている「新感覚的文章」とは一人称ではなく三人称で語られた作品である点である。神谷[1969]は、新感覚派時代の横光の作品に注目して、そのほとんどが三人称で書かれていること、それを川端が「主客一如的な客観主義」と呼んで評価していたことを述べている。そして、「むしろ川端康成の方が『夜ひらく』に関心をもったであろう」(9頁)ことを川端の短編『青い海 黒い海』を取り上げ考察している。

確かに川端の新感覚派時代の小説の特徴は、『伊豆の踊子』を始め、一人称で語られることが多く、川端自身は新感覚派の作品は一人称で書いた方が、効果があると考えていたと推測される。これを川端は「新主観主義的表現」と呼ぶのだが、これを具体的に作品で試したのが、先の川端の短編『青い海 黒い海』である。その代表的文章を挙げる。

蘆の葉が私の眼の中に一ぱいに拵がって来ました。私の眼は一枚の蘆の葉になって行きました。やがて、私は一枚の蘆の葉でした。

川端の研究者でなくとも、『雪国』の読者であれば、もうお気づきであろうが、川端の新感覚派的文章である「新主観主義的表現」を発展させた表現が、もっともよく現れているのは、『雪国』の冒頭部ではなく、冒頭部に続く場面で登場する葉子の眼と顔が、列車内のガラスに映りこむ様子を描写した部分である。

鏡の底には夕景色が流れていて、つまり写るものと写す鏡とが、映画の二重写しのよ

うに動くのだった。(中略) 殊に娘の顔のただなかに野山のともし火がともった時には、島村はなんともいえぬ美しさに胸が震えたほどだった。

川端が「新主観主義的表現」を『青い海 黒い海』などで作品化し、新感覚派であった時代を通り抜け、三人称で語られる小説『雪国』の表現にたどり着いたのは自然な流れであると筆者は考えるが、その詳細な考察は今後の課題である。

本稿は、川端康成の『雪国』の冒頭部を巡る「視点」の議論の問題点を整理するとともに、その成立の背景をたどってきた。『雪国』は「三人称」の小説でも、視点人物である島村の一人の目を通して描かれる、ジュネットの「内的固定焦点化」にあたる。この手法は、ヘンリー・ジェイムズの『メイジーの知ったこと』など海外の小説にも見られるが、その異同についても、今後の課題としたい。

## 謝辞

本稿を書くにあたっては多くの方々からご指導をいただきました。査読としてご指導いただいた先生並びに関係者の方々には心よりお礼申し上げます。特にジェラルド・ジュネットの焦点化に関するご指摘は大変参考になりました。

## 【参考文献】

- 青山文啓 [2020] 『『雪国』 冒頭部の翻訳をめぐる—中島文雄『日本語の構造』(1987年)を機縁として』『ことばと文字』13, 187-193, くろしお出版
- 安藤宏 [2012] 『近代小説の表現機構』岩波書店
- 安藤宏 [2015] 『「私」をつくる—近代小説の試み』岩波書店
- 生田長江 [1925] 「文壇の新時代に与ふ」『新潮』42, 49-61, 新潮社
- 池上嘉彦 [2006a] 「〈主観的把握〉とは何か—日本語話者における〈好まれる言い回し〉」『言語』35, 20-27, 大修館書店
- 池上嘉彦 [2006b] 『英語の感覚・日本語の感覚—〈ことばの意味〉のしくみ』日本放送出版協会
- 大村梓 [2016] 「翻訳家堀口大学を巡る—考察—ポール・モーランという言説」『山梨国際研究、山梨県立大学国際政策学部紀要』11, 1-11
- 小倉史 [2017] 「映り込む駒子、消失する島村—『雪国』映画化における語りと視線」『愛知淑徳大学論集、創造表現学部篇』7, 1-15
- 金谷武洋 [2004] 『英語にも主語はなかった—日本語文法から言語千年史へ』講談社
- 神谷忠孝 [1969] 「横光利一における象徴意識の変遷」『帯広大谷短期大学紀要』6, 1-15
- 川端康成 [1969] 『雪国』『川端康成全集第5巻』新潮社
- 川端康成 [1982] 『雪国 (プレオリアル)』『川端康成全集第24巻』新潮社
- 川端康成 [1982] 「新進作家の新傾向解説」『川端康成全集第30巻』新潮社
- 川端康成 [1952] 『青い海 黒い海』『伊豆の踊子・温泉宿』岩波書店
- 熊倉千之 [1990] 『日本人の表現力と個性—新しい「私」の発見』中央公論社
- 盛文忠 [2006] 「『雪国』の中国語訳から見る日中両言語の認知的差異—文型・主語・数量詞の使用を中心に」『日本認知言語学会論集』6, 589-592
- 千葉亀雄 [1924] 「新感覚派の誕生」『世紀』11月号, 再収: 千葉俊二・坪内祐三編『日本近代文学評



- 論選明治・大正篇』[2003] 岩波書店
- 橋本陽介 [2014] 『ナラトロジー入門—プロップからジュネットまでの物語論』 水声社
- 平山三男 [1993] 『遺稿『雪國抄』影印本文と注釈・論考』 至文堂
- モオラン, ポオル「夜ひらく」堀口大學訳『堀口大學全集補巻1』[1984] 小沢書店
- 森田良行 [1998] 『日本人の発想、日本語の表現—「私」の立場がことばを決める』 中央公論社
- 山本史郎 [2020] 『翻訳の授業—東京大学最終講義』 朝日新聞出版
- 湯浅英雄 [2010] 「日本語表現の特質をつなぐもの 視点、オノマトペ、「なる」的構文からのアプローチ」『神戸大学「近代」』 104, 21-45
- 横光利一「頭ならびに腹」『定本横光利一全集第1巻』[1981] 河出書房新社
- 横光利一「ユーモラス・ストオリイ」『定本横光利一全集第13巻』[1982] 河出書房新社
- Seidensticker, Edward George [1956] *Snow Country*. C. E. Tuttle.
- Suzuki, Sadami (鈴木貞美) [2009] REWRITING THE LITERARY HISTORY OF JAPANESE MODERNISM, translated by Miri Nakamura, *Pacific Rim Modernisms* (eds.) Mary Ann Gillies, Heren Sword and Steven, Tao, University of Toronto Press. 70-99
- Suzuki, Sadami (鈴木貞美) [2012] REWRITING THE LITERARY HISTORY OF JAPANESE MODERNISM, in: Roy Starrs (ed.) *Rethinking Japanese Modernism*, *Global Oriental*. 37-61
- Whorf, Benjamin Lee [1939a] The Relation of Habitual Thought and Behavior to Language, in: John B. Carroll (eds.) [1956] *Language, Thought, and Reality: Selected Writing of Benjamin Lee Whorf*, Cambridge MA. 173-204 (ウオーフ, B. L. 池上嘉彦訳 [1993] 『言語・思考・現実』 講談社 94-142)
- 叶渭渠訳 [2002] 《雪国》 人民文学出版社